

ると回っているような気持ちにさせられました。(中略) どうして、こんな女にあの美しい人々をおとしめる資格があるのでしょうか。どうして、神様は、このような女に、そんな権利を持たせたのでしょうか。

私は、何事もなかったように普通の顔をしていました。本当は、皮膚一枚剥がされれば、鳴き声の塊である私のことなど、誰も気がつかなかったのです。気がつくべき先生方ですら。もっとも、私は、そんなごたいそうなものを子供である先生方に期待してはなりませんでしたが、失望もありませんでした。

(私が転校したために) 私といつも一緒にトイレにいた女の子は、ひとりでいかななくてはならなくなるのです。このことは、考えようによっては両親を亡くした時くらいに困ることなのです。(中略) 一緒にトイレにいくお友だちがいらないというのはせつないことです。

自殺を決意し、遺書を「ママ、パパ、おねえちゃん。先だつ不幸をお許ください。杏は、人生には似合わない子です。」と、途中まで書いた。しかし、何とか自殺を思いとどまったのは、家族の日常生活を故意に乱したくない、という最も身近な人とのつながりを感じていた

から。そして、生きる気力を蘇らせたのは、学級担任の代わりに理科の授業を受け持った男性教師の「蚊」の話だった。



「沈黙の町」

いじめは、理由の有無を問わず、絶対に許されない差別行為であり、犯罪行為である。だが、今日の中学生は、それ相応の理由があれば、いじめ行為に加担しても構わないと思いついてしまう危険をはらんでいる。

心の育ちや人権感覚、道徳性の未熟な中学生がいれば、大人以上にしっかりとた中学生がいる。集団自我の肥大によって、集団の雰囲気流される中学生がいれば、流されない中学生がいる。だが、多くの親と教師は、「集団」という状況において、中学生を十把一からげにして

同一視し、中学生一人一人の内面の大きな差異に関心を示さない。

学年主任の教師が、「中学生ですから、言葉足らずで誤解を招くことが多々あると思います。大人にマイクを向けられれば緊張もするし、そこで出たコメントが正しいとは限りません。」と言ったように、中学生は、親や教師、刑事、記者に本当のことを言わないときがある。それは、自分の不利になるから嘘をつくとか、黙り込むとかではない。言葉の剥がれやすいメッキを嫌悪する成長期であり、圧倒的に言葉の少ない世代であり、また、仲間との秘密や約束を頑なに守り通すことによって、自分の「存在」を確認しているからである。

「逮捕・補導されたほかの少年たちも、普通の中学生なのだろう。普通なのに経験と常識がないことが、少年犯罪の悲劇なのだ。しでかした後で事の重大さに気づく。」(K署刑事課刑事)

中学生はわからない。(学級担任の) Iは中学教師になってから、日々それを実感していた。自分の意思とは異なることを、なぜか起こしてしまう。彼らが一番恐れることは孤立で、ノリが悪いとか、真面目だとか、そう言われたくないばかりに常識を踏み外してしまう。池に浮か

ぶ水草のように、根っこがなく、不安定なのだ。おまけに集団の空気にいとも簡単に呑み込まれ、流される。ゲームと現実の区別がもともつきにくい年代で、それゆえ中学生には陰惨な事件が多い。

「おれな、今の中学生は携帯電話とネットがあるから、教師ながら生徒を気の毒に思うときがあるんだよね。(ネットで) 自由にものを言えるようになって、彼らは生身の人間を充分経験していないから、死ねだの、ゴミだの、ひどい言葉を平気で発信するわけよ。」

中学生は、親や教師への告げ口を忌み嫌い、告げ口して仲間を売るくらいなら、自分で罪を被ってしまう。

中学生は事の重大さがわからない。だから、単純なヒロイズムに侵され、周囲に誤解を与える。中学生は、命の尊さも、人生の意義も、人の気持ちも、ちゃんとわかってはいないのだ。

K署が、生徒に二度目の聞き取り調査をしたら、新たな証言が次々と出てきたので、学級担任教師は驚くとともに、あらためて生徒指導の難しさを痛感した。中学生は、鳥の群れのようなものだ。みな飛ぶ方に自然と身体が反応し、考えもなくついていく。